

小児看護は大丈夫か？

子供の数が減り続けている現在、医療界もその影響と無縁ではありません。少子化と小児科医の減少により小児病棟は次々と閉鎖されており、入院日数の短縮化で大人に比べて比較的可能な濃密なかかわりも少なくなり、それにともない学生の実習も困難になっている実態があります。さらには、若い看護師自身、子供に接した経験があるほうが少なくなり、そのためか患児やその親とのコミュニケーションがうまく図れないケースも出てきているようです。

少子傾向自体はまだこれからも続くことから、現状は上向きになることはありません。だからこそ、一般病院の看護師においても、いま改めて小児看護の重要性を認識しておく必要があると思います。今回は、小児看護を取り巻く現状を4つの立場から語っていただき、問題点に注目していただきたいと思います。

子供は小さな大人ではありません。既にほとんどが高齢者看護になっている成人看護とは違った視点があることを、忘れないようにしてください。

小児看護の未来はどちら？ 当院の活動を通してその方向性を考える ● 414 ページ
子どもが減るにしがたって、専門病院であってもその取り組みに変化が起きるのは当然です。今後の可能性として、小児看護を施設内だけで考えるではなく、広い視点を持って取り組む必要性について語り、そのなかで、専門病院としての役割の明確化も示します。

都心の総合病院における小児看護の実態
混合病棟化が避けられないなかでの小児看護のやりがい ● 422 ページ
混合病棟化が避けられない状況を踏まえて、診療圏は広いが、大学病院やこども病院のように専門的治療を求めるばかりではない都会の総合病院では、どのように「小児看護」を維持していけばよいのかについて、語っていただきます。

地方の基幹病院で小児看護は生き残れるか ● 427 ページ
小児科医の不在は、地方の基幹病院であってももはや避けられないところまで来ています。そんななかで、小児医療・看護にどのように取り組んでいけばよいのか、取り組んでいけるのか、懸念のなかにある希望について述べていただきます。

子どもが減少するなか、今後の臨地実習にどう挑むのか ● 432 ページ
子どもが病院にいないということとは、小児看護実習が成立しないことを意味します。子どもへの接し方がわからないという学生が増えるなか、今後の小児看護実習をどのように維持していこうとしているのか、現実を踏まえて展望していただきます。
